

『Teaching Tips 授業改善のための工夫・失敗事例』

(平成 28 年 1 月発行) に掲載された事例の分析

平成 29 年 5 月

F D 推進委員会

冊子作成の経緯と分析手順・方法の概要

1. 『Teaching Tips 授業改善のための工夫・失敗事例』発行までの流れ

(1) 事例作成依頼の対象者

全教員（助教、非常勤講師含む）

(2) 事例作成の依頼～提出締切

依頼日：平成27年4月1日

提出締切：平成27年5月22日

(3) 依頼方法

以下の通り文書にて依頼すると共に info@MUSES から依頼。

- ①専任教員：4月1日の合同教授会にて文書配付（FD推進委員長より口頭説明）
- ②非常勤講師：4月1日に教員個人のメールボックスに文書配付

(4) 作成・提出方法

MUSES より原稿用の指定様式（Excel ファイル）を各自でダウンロードして作成の上、各学科のFD推進委員にファイルを添付してメールで提出する。

FD推進委員は、学科内教員から提出されたファイルを取りまとめて、本取組みの事務担当部署である教育開発支援室へ提出する。

※音楽学部と薬学部は学部、共通教育部は部単位でとりまとめる。

(5) 依頼時の条件

- ①専任教員はひとり1科目以上の工夫事例（または失敗事例）を提出する。
- ②非常勤講師は任意提出とする。
- ③新任教員は可能な範囲で前任校での事例をもとに作成する。
- ④これまでに担当した授業の中から参考となる事例を選んで作成する。
授業形態（講義、演習、実験、実技、実習）は問わない。

(6) 事例依頼の概要

記入様式の項目は以下の通り。詳細は図表 1-1 に示す通りである。

- ①授業形態（講義、演習、実験、実技、実習から選択）
- ②科目名
- ③開講学科・学年
- ④受講者数
- ⑤担当者名（完成冊子には担当者名は記載せず）
- ⑥必選区分（必修、選択、選択必修から選択）
- ⑦最も力を入れた取り組みポイント（以下から選択）
 - ・理解を深める取り組み

- ・意欲・関心を高める取り組み
 - ・発言を促す取り組み
 - ・時間外学習を促す取り組み
 - ・学習態度を良くする取り組み
 - ・その他
- ⑧自由記述欄（3項目）
- ・どのような方法を取り入れたか
 - ・取り組みの効果
 - ・今後の課題

（7）校正・編集から発行まで

- ①校正：平成 27 年 7 月～12 月の間に執筆者本人の校正 2 回を含めて 5 回の校正を実施。
- ②刊行：平成 28 年 1 月
全教員へ配布、事務部門へは 1 部署に 1 部ずつ配布。
PDF ファイルを F D 推進委員会 Web サイトへアップロード。

（8）事例提出状況

- ①提出事例数：339 事例
開講学科別詳細は図表 1-2 参照
- ②提出者数：297 名
内 294 名が専任教員で、依頼した専任教員の 84.4%にあたる。
詳細は図表 1-3 参照（研究所所属教員は除く）。

図表 1-1 『Teaching Tips 授業改善のための工夫・失敗事例』作成にかかる事例記入様式

＜これまでに担当された授業の工夫・失敗事例＞

授業形態		科目名	
開講学科・学年		受講者数	約 名
担当者名		必選区分	
最も力を入れた 取り組みポイント (項目に☑)	<input type="checkbox"/> 理解を深める取り組み		
	<input type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取り組み		
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取り組み		
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取り組み		
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取り組み		
	<input type="checkbox"/> その他 ()		
どのような方法を取り入れたか			
取り組みの効果			
今後の課題			

図表 1-2 授業の開講学科別 提出事例件数

件

開講学科	件数	科目形態					必	選	選必	不明	取組みのポイント					
		講義	演習	実験	実習	実技					理解	意欲・関心	発言	時間外学習	学習態度	その他
日文	大日	6	4	1		1	2	3	1		3	3	2		1	
	短日	2		2			1	1			1	1				
	計	8	4	3		1	3	4	1		4	4	2		1	
英文	大英	19	6	13			5	6	9		10	11	10	9	4	2
	短英	1		1					1		1	1	1	1	1	1
	前任校科目	3	3				1	1		1	1	3	2	1	2	
計	23	9	14			6	7	10	1	12	15	13	11	7	3	
教育	大教	27	16	12			2	25			17	11	8	6	5	5
	短教	11	1	10			1	10			6	5	3	1	1	1
	前任校科目	2		1		1				1	1	2				
計	40	17	23		1	3	35	1	1	25	16	11	7	6	6	
心福	大心	19	15	4			4	15			10	11	7	5	1	1
	短心	6	5	1			1	5			1	3	1		2	
	大学院（院臨修）	1	1					1				1				
計	26	21	5			5	21			11	15	8	5	3	1	
健康	新健	26	12	7	1	1	5	6	16	4	10	14	6	8	4	2
	短健	4	1	1			2	1	1	2	3	4	1	2	2	1
	前任校科目	1	1								1	1				
計	31	14	8	1	1	7	7	17	6	1	14	18	7	10	6	3
環境	大環	19	8	3	3	5		19			12	12		9	6	2
	短生	9	5	1	2	2	6	4			4	4		1	1	2
	計	28	13	4	5	7	6	23			16	16		10	7	4
食物	大食	30	22	2	4	2	20	11	1		21	13	8	10	8	1
	短食	4	4				1	3			3	2		2		
	前任校科目	1	1				1				1	1				
計	35	27	2	4	2	22	14	1		25	16	8	12	8	1	
情報	大情	11	7	4			5	6			6	8	4	4	3	2
	計	11	7	4			5	6			6	8	4	4	3	2
建築	大築	14	10	3	1		14				13	4			1	
	大学院（院築修）	2	1	1				1	1		1	1	2			
	計	16	11	4	1		14	1	1		14	5	2		1	
音楽	大演	8		4		4	4	4			3	6	3	4	2	1
	大応	8	2	5		1	3	5			4	4	1	4	2	
	大声専	1		1				1			1	1	1	1		
計	17	2	10		1	4	7	10		8	11	5	9	4	1	
薬学	新薬	42	34			8	36	6			34	14	1	10	3	1
	大康	17	11	4	1	1	8	9			12	8	4	2	1	
	計	59	45	4	1	9	44	15			46	22	5	12	4	1
看護	大護	2	1	1			2				1	1				
	前任校科目等	17	10	7			17				11	6	2	5		2
	計	19	11	8			19				12	7	2	5		2
共通教育	共通	26	20	5		1		26			12	18	5	2	5	2
	計	26	20	5		1		26			12	18	5	2	5	2

区分	件数	科目形態					必	選	選必	不明	取組みのポイント					
		講義	演習	実験	実習	実技					理解	意欲・関心	発言	時間外学習	学習態度	その他
大学	248	148	63	10	19	9	111	125	15		156	120	54	71	41	17
短大	37	16	16	2	2	2	11	24	3		19	20	6	7	7	5
大学院	3	2	1					2	1		1	2	2			
専攻科	1		1					1			1	1	1	1		
共通教育	26	20	5		1			26			12	18	5	2	5	2
前任校科目等	24	15	8			1	19	1	1	3	16	10	4	6	2	2
合計	339	201	94	12	22	12	141	179	20	3	205	171	72	87	55	26

図表 1-3 専任教員の所属別事例提出率 %

所属	日文	英文	教育	心福	健康	環境	食物
提出率	55.6	80.8	82.2	100.0	92.9	96.0	82.5

情報	建築	音楽	薬学	共通	看護
73.3	87.5	100.0	87.9	100.0	63.0

図表 1-4 授業開講及び教員の所属学部・学科略称

授業開講・教員所属	略称		授業開講・教員所属	略称	
日本語日本文学科	大日	日、日文	生活環境学科	大環	環、環境
日本語文化学科	短日		生活造形学科	短生	
英語文化学科	大英	英、英文	食物栄養学科	大食	食、食物
英語キャリア・コミュニケーション学科	短英		食生活学科	短食	
教育学科	大教	教、教育	情報メディア学科	大情	情、情報
幼児教育学科	短教		建築学科	大築	
心理・社会福祉学科	大心	心、心福	演奏学科	大演	音、音楽
心理・人間関係学科	短心		応用音楽学科	大応	
健康・スポーツ科学科	新健	健、健康	薬学科	新薬	薬、薬学
健康・スポーツ学科	短健		健康生命薬科学科	大康	
			看護学科	大護	護、看護
			共通教育部、共通教育科		共通

2. 分析対象事例数と調査項目の選定

(1) 分析の対象とする事例の選定

提出事例 339 件の内、以下の①～⑤に該当する事例は分析の対象から省き、大学の各学科開講科目についての事例 240 件、短期大学部の各学科開講科目についての事例 36 件、共通教育科目についての事例 26 件、合計 302 件の事例を分析の対象とした。分析対象事例を再度分類した結果が図表 1-5 である。失敗事例は件数が少なく、記述には工夫の部分も含まれたため、全てを工夫事例として扱う。

[分析対象外とした事例]

①大学院・専攻科の事例

提出された事例数が、大学院 3、専攻科 1 と少なかったため

②前任校や他大学における事例

本学で行われている教育の実態を把握するため

③看護学部の事例

平成 27 年度新設学部であり、事例の大半が前任校における事例であったため

④外国語で記載された事例

日本語訳をしなかったため

⑤複数の科目にまたがる内容の事例

分析する際の統一性を考慮して、基礎・発展等で継続性のある科目を除き、複数の科目の内容がまとめて記載された事例を対象外とした。

図表 1-5 領域・授業の開講学科別 分析対象事例件数

件

領域	開講学科	件数	科目形態					必	選	選必	取組みのポイント						
			講義	演習	実験	実習	実技				理解	意欲・関心	発言	時間外学習	学習態度	その他	
			文系	日文	大目	6	4				1	1	2	3	1	3	3
	短日	2		2			1	1		1	1						
	計	8	4	3	0	1	3	4	1	4	4	2	0	1	0		
	英文	大英	17	6	11		5	5	7	8	9	8	7	3	2		
	短英	1		1					1	1	1	1	1	1			
	計	18	6	12	0	0	5	5	8	9	10	9	8	4	3		
	教育	大教	25	15	10		1	24		17	10	6	5	5	4		
	短教	11	1	10			1	10		6	5	3	1	1	1		
	計	36	16	20	0	0	2	34	0	23	15	9	6	6	5		
	心福	大心	19	15	4		4	15		10	11	7	5	1	1		
	短心	6	5	1			1	5		1	3	1		2			
	計	25	20	5	0	0	5	20	0	11	14	8	5	3	1		
健康・スポーツ系	健康	新健	26	12	7	1	1	5	6	16	4	10	14	6	8	4	2
	短健	4	1	1			2	1	1	2	3	4	1	2	2	1	
	計	30	13	8	1	1	7	7	17	6	13	18	7	10	6	3	
	環境	大環	19	8	3	3	5		19		12	12		9	6	2	
	短生	8	5		1	2		5	3		3	4		1	1	1	
	計	27	13	3	4	7	0	5	22	0	15	16	0	10	7	3	
	食物	大食	28	20	2	4	2	18	9	1	19	12	7	9	8	1	
	短食	4	4					1	3		3	2		2			
	計	32	24	2	4	2	0	19	12	1	22	14	7	11	8	1	
	情報	大情	11	7	4			5	6		6	8	4	4	3	2	
	計	11	7	4	0	0	0	5	6	0	6	8	4	4	3	2	
	建築	大築	14	10	3	1		14			13	4			1		
	計	14	10	3	1	0	0	14	0	0	13	4	0	0	1	0	
	薬学	新薬	42	34			8	36	6		34	14	1	10	3	1	
	大康	17	11	4	1	1		8	9		12	8	4	2	1		
	計	59	45	4	1	9	0	44	15	0	46	22	5	12	4	1	
音楽系	音楽	大演	8		4		4	4			3	6	3	4	2	1	
	大応	8	2	5		1		3	5		4	4	1	4	2		
	計	16	2	9	0	1	4	7	9	0	7	10	4	8	4	1	
共通教育科目	共通教育	共通	26	20	5		1			26		12	18	5	2	5	2
	計	26	20	5	0	1	0	0	26	0	12	18	5	2	5	2	
合計		302	180	78	11	22	11	116	170	16	181	153	60	76	52	22	

区分	件数	科目形態					必	選	選必	取組みのポイント					
		講義	演習	実験	実習	実技				理解	意欲・関心	発言	時間外学習	学習態度	その他
大学	240	144	58	10	19	9	106	121	13	151	115	49	67	40	16
短大	36	16	15	1	2	2	10	23	3	18	20	6	7	7	4
共通教育	26	20	5	0	1	0	0	26	0	12	18	5	2	5	2

科目形態	件数	取組みのポイント (複数回答)						受講者数	件数	取組みのポイント (複数回答)					
		理解	意欲・関心	発言	時間外学習	学習態度	その他			理解	意欲・関心	発言	時間外学習	学習態度	その他
講義	180	113	86	28	38	31	7	1~29名	47	24	28	15	16	8	5
演習	78	40	41	27	25	9	10	30名~49名	77	52	37	21	20	12	6
実験	11	7	4	1	3	3	1	50名~99名	101	55	49	16	23	16	9
実習	22	14	13	2	7	7	1	100名~149名	63	41	34	7	16	10	2
実技	11	7	9	2	3	2	3	150名以上	14	9	5	1	1	6	0

科目形態	件数	取組みのポイント (複数回答)					
		理解	意欲・関心	発言	時間外学習	学習態度	その他
必修	116	76	48	18	30	14	6
選択	170	96	95	36	43	36	13
選択必修	16	9	10	6	3	2	3

(2) 対象事例のデータ化と分析項目の設定

データ分析用として Excel ファイルを別途準備し、提出された事例の内容について、1件1行のデータとして全項目を入力した（図表 1-6）。

図表 1-6 分析に用いたデータ（一部）

No.	科目名	大・短・共通	開講学科	学年	受講者数	授業形態	必・選・選必	理解	意欲・関心	発言	時間外学習	学習態度	その他	その他詳細	どのような方法を取り入れたか	取り組みの効果	今後の課題
1	古文入門	大学	大日	1	50	講義	必修		○						古文を自ら読解する力をつけるため、詳細な解説を施すことなく現代語訳に取り組み、完成した学生一人ひとりが違う興味・関心をもっているはずなので、学習者はその「違い」を認識するとともに、自分	個別指導を取り入れることで、これまで自分自身がわかっていなかったところまで取り組んでい	時間的には余裕をもって設定しており、担当者としては、時間ぎりぎりまで取り組んでい
2	地域文化研究	大学	大日	1	30	講義	選択		○						受講生にフィールドワークを課し、それぞれの興味に応じて調査して発表する形式。本学周辺もしくは	一人ひとりが違う興味・関心をもっているはずなので、学習者はその「違い」を認識するとともに、自分	フィールドワークの意義や具体的な方法をきちんと学生に伝えておく必要がある。あらかじめプレゼンテー
3	日本語教育学A・B	大学	大日	2	130	講義	選択		○						～ビジターセッション～【目的】受講生が日本語教育現場の状況を知り、また日本語学	実施後、受講生は課題レポートを作成する。そこでの記述を分析すると、以下のよう	受講生が多く、グループ活動はかなりの規模になるのが悩みの種である。一過性の体験
4	音声・音韻論	大学	大日	2	40	講義	選必	○		○					音声学と音韻論の2つの側面から、言語音一般の性質、また、とりわけ英語と比較して	とりわけ身体感覚による音声の把握には大方の学生が興味を示し、また授業中に実践し	活動のねらいが少なく、そこで「ノリの悪い学生」がおり、これへの対処が難しい。基本的に講義科目であり、音
5	演習 I	大学	大日	3	15	演習	必修	○							10年以上前から、徹底的に予習（精読）してもらうために、演習 I（3年ゼミ）において「反転授業」	ゼミ生全員が、ちゃんと小説を読めるようになる」とともに、文章力も飛躍的に伸びる。当	担当者（私）の負担も大きいのが、つらい点ではあるが、今後も続けていきたい。茶川や隆夫を対

今回の事例収集においては、作成の際の教員の負担を軽減すること、短期間で編集・発行するためにシンプルな構成の冊子にすること、収集した事例をデータ化して全学的FDに活用出来るようにすること等を勘案し、統一の記入様式が用いられた。授業に付随する諸項目についてはドロップダウンリストからの選択式とし、後で集計しやすいようにされている。

これに対して、後半の自由記述欄は「どのような方法を取り入れたか」、「取り組みの効果」、「今後の課題」という3つの設問だけで、書き方はフリーである。この部分に書かれた内容は各教員が授業において試みた工夫や苦勞等、教員自身の「生の声」であり、本学の教育の実態が最も表れる部分である。このため3つの自由記述欄の中で、教員が実際に取り組んだこと（行動したこと）を中心に記載されている「どのような方法を取り入れたか」に焦点を当てて分析した。

3. 分析方法・手順について

(1) 分析テーマの設定

1件1行ずつの内容について、記述内容全体とそこに含まれるキーワードをもとに、工夫を“授業”についての以下の6つのカテゴリに分類した。6つのカテゴリは、他大学の事例集や、教育方法・授業改善の視点で書かれた著作物の他、本学に平成18年に発行された『授業の工夫事例・アイディア等に関するアンケート』に記載されたカテゴリ分類を参考にして決めた。

[工夫の分類カテゴリ]

- ①授業形態に関する工夫
- ②授業展開に関する工夫
- ③教材内容に関する工夫
- ④教材提示に関する工夫
- ⑤資料配布に関する工夫
- ⑥評価に関する工夫

(2) 自由記述欄「どのような工夫を取り入れたか」の分析方法について

分析用 Excel データを用いて、自由記述欄「どのような工夫を取り入れたか」の 1 件ずつの内容について、文中で「①授業形態に関する工夫」、「②授業展開に関する工夫」、「③教材内容に関する工夫」、「④教材提示に関する工夫」、「⑤資料配布に関する工夫」、「⑥評価に関する工夫」に該当すると思われる部分をピックアップし、①～⑥の分類コード別に分類した（一つの事例に複数の工夫が重複する場合あり）。なお、同じキーワード・キーセンテンスであっても、そこに複数の工夫が重複している場合は、どちらの工夫に重点がおかれたものかを文章の前後の表現を参考にして分類した。同等の比重の場合には両方のカテゴリに亘る工夫と判断した。

この作業を行った後、各科目に付随する諸条件（「大学、短大、共通教育科目別」、「開講学科別」、「必修、選択、選択必修別」、「科目の形態別」等）によってカテゴリごとの工夫がどのように行われているかについてグラフ化し、数量的に分析を行った。その結果を以降に示す。

分析結果の要約

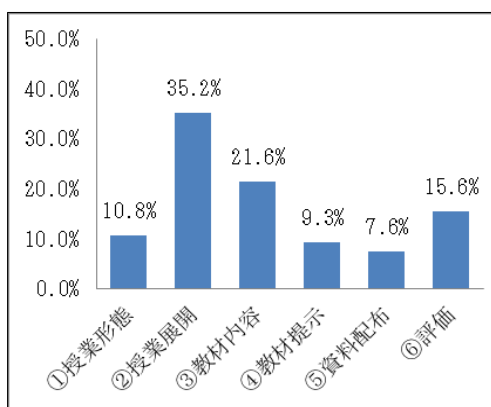
1. 自由記述の分析から見える工夫のカテゴリ

(1) 自由記述欄「どのような工夫を取り入れたか」における工夫のカテゴリ別割合

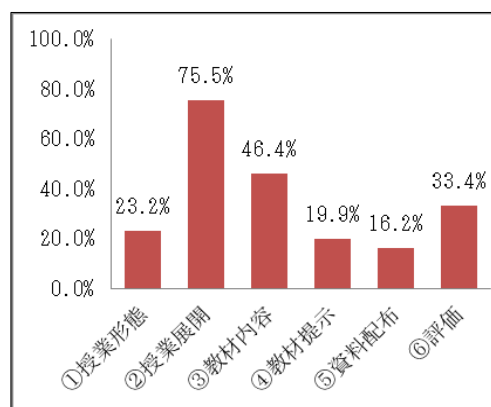
図表 2-1 自由記述欄「どのような工夫を取り入れたか」の内容における工夫のカテゴリ別件数と割合 件

工夫のカテゴリ	①授業形態	②授業展開	③教材内容	④教材提示	⑤資料配布	⑥評価	カテゴリ出現数計	事例数計
記述があった事例数(件)	70	228	140	60	49	101	648	302

カテゴリ出現数に対する割合 (n=648) %



事例数に対する割合 (n=302) %



6つのカテゴリに分けた工夫の記載の総数は302件全事例の合計で648件となった。この中で最も多かったのが「②授業展開に関する工夫」であり、工夫のカテゴリ出現数(648件)に対する割合でみると全体の35.2%にあたる。2番目に多かったのが、「③教材内容に関する工夫」(21.6%)、3番目が「⑥評価に関する工夫」(15.6%)であった。この後、「①授業形態に関する工夫」(10.8%)、「④教材提示に関する工夫」(9.3%)と続き、最も少なかったのは「⑤資料配布に関する工夫」(7.6%)であった。

これを302件の対象事例数に対する割合で見ると、1位の「②授業展開に関する工夫」は全体の75.5%の事例で実施されていることになる。同様に「③教材内容に関する工夫」は全体の46.4%の事例で、「⑥評価に関する工夫」は33.4%の事例で実施されていることを表している。

(2) それぞれのカテゴリに特徴的な工夫について

各事例の自由記述内容を読みながら、そこに記載された工夫のキーワード・キーセンテンスを6つのカテゴリに分類した。各カテゴリに頻出するキーワードや、取り組みとしての特徴は図表2-2の通りである。

図表 2-2 6つのカテゴリにおけるキーワード

カテゴリ	キーワード
①授業形態に関する工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・個別指導 ・ペアワーク ・グループワーク、グループディスカッション、グループ発表 ・ワークショップ ・習熟度別（能力別）指導 ・クラス分割 ・座席指定 等
②授業展開に関する工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の導入時、授業中、終了時に応じた工夫 ・時間外学習の促進 ・小テスト、確認テスト、学修の振り返りアンケート、ミニツッペーパー、レポート課題（理解度確認、授業内容の定着、評価への活用） ・ICT活用 ・講義、演習形式、体験学習、模擬授業、アクティブ・ラーニング等、様々な授業形態の効果的な導入 等
③教材内容に関する工夫	<p>「わかりやすく知識の定着を図れるもの」、「興味、関心を高めるもの」、「身近でイメージを描きやすいもの」の具体例（以下）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プリント、ワークシート（書き込み式、授業内容のポイント、時間外学習用等） ・独自テキスト ・実体験の場の提供 ・実際の現場の事例 ・視聴覚教材 等
④教材提示に関する工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・ICT活用（μ Cam¹⁾、e-learning システム 等） ・動画教材の活用 ・パワーポイントの活用（理解及びイメージのしやすさを考えた提示の工夫→図やイラスト、文字の大きさ等の配慮） ・板書の工夫 ・参考書籍や関連HPの紹介
⑤資料配布に関する工夫	<p><資料の内容の工夫></p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科書のアウトライン ・講義内容のまとめ ・予習、復習用プリント ・書き込みノート式資料 ・学生のレポート集 ・学生のコメント抜粋 <p><配布方法の工夫></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ICT活用（μ Cam¹⁾、e-learning システム、ネットワークフォルダ、クラウド、LINE、ホームページ 等）

なお「授業展開に関する工夫」には、他のカテゴリのキーワードにあげられる言葉も多く含まれる。例えば「授業形態に関する工夫」のキーワードである「グループワーク」、「グループディスカッション」等がそれにあたる。しかし、それが単独の工夫ではなく、毎回の授業の導入から終了までの中で、または1学期15回の授業全体の構成の中で、複数の工夫を組み合わせ取り入れている事例を「授業展開に関する工夫」として分類した。

また予習・復習等の時間外学習についても、次回の授業への導入や、学んだ内容の定着・深化等を目的として行われている為、授業展開の中での工夫と位置付けた。この事が、全

での取り組みの中で、最も高い割合となった理由であると同時に、授業全体の構成を考え、効果的に工夫が取り入れられていることの裏付けとも言えるのではないだろうか。

2. 科目の諸条件による工夫の傾向（6つのカテゴリ）について

対象事例の科目に付随する諸条件で分けた場合の工夫の傾向（6つのカテゴリ）を示す。

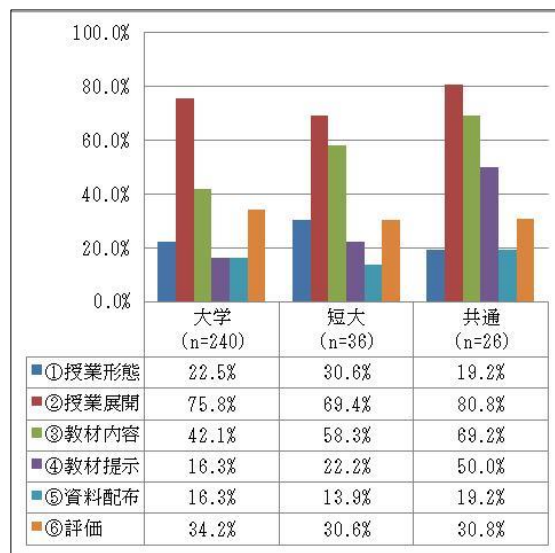
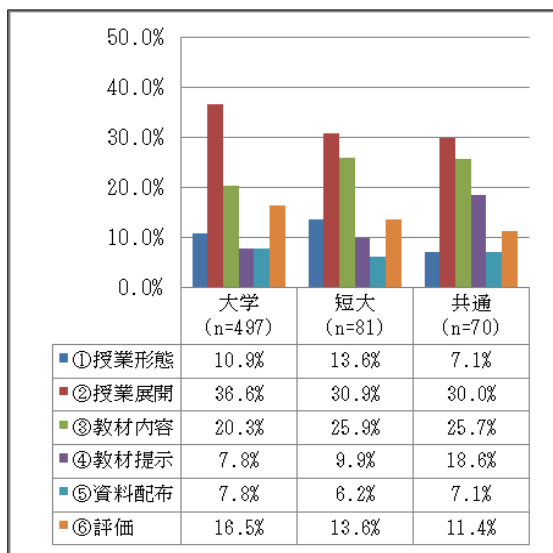
（1）大学開講科目、短大開講科目、共通教育科目別状況

図表 2-3 大学・短大・共通教育の開講科目ごとの工夫のカテゴリ分類（複数回答） 件

工夫のカテゴリ	大学	短大	共通教育
①授業形態	54	11	5
②授業展開	182	25	21
③教材内容	101	21	18
④教材提示	39	8	13
⑤資料配布	39	5	5
⑥評価	82	11	8
工夫のカテゴリ計	497	81	70
事例数計	240	36	26

カテゴリ出現数に対する割合（n=648） %

事例数に対する割合（n=302） %



大学開講科目、短大開講科目、共通教育科目の全てにおいて「授業展開に関する工夫」が多い。特に大学開講科目では他のカテゴリに比べて際立って多い。これに対して、短大開講科目や共通教育科目では、「教材内容に関する工夫」も同様に多く取り入れられていることがわかる。また、共通教育科目では「教材提示に関する工夫」が大学・短大それぞれの開講科目に比べて多いことが特徴と言える。「共通教育科目」は、大学・短大、学部・学科、学年に関係なく、興味や関心に応じて選択・受講することができ、幅広い教養と豊かな

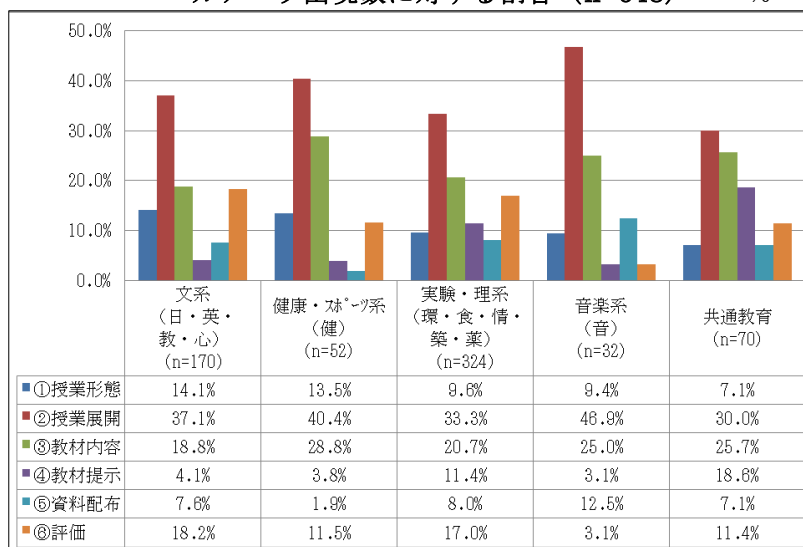
な人間性を育むための科目である。短大開講科目は今回の対象事例 36 件の内、23 件が選択科目である。対して大学開講科目の事例 240 件の内、選択科目は 106 件で必修科目の 121 件よりやや少なかった。このことも大学、短大、共通教育の開講科目による工夫のカテゴリに違いが生じた一因であると考えられる。

(3) 開講学科の領域別状況

図表 2-4 開講学科の領域ごとの工夫のカテゴリ分類 (複数回答) 件

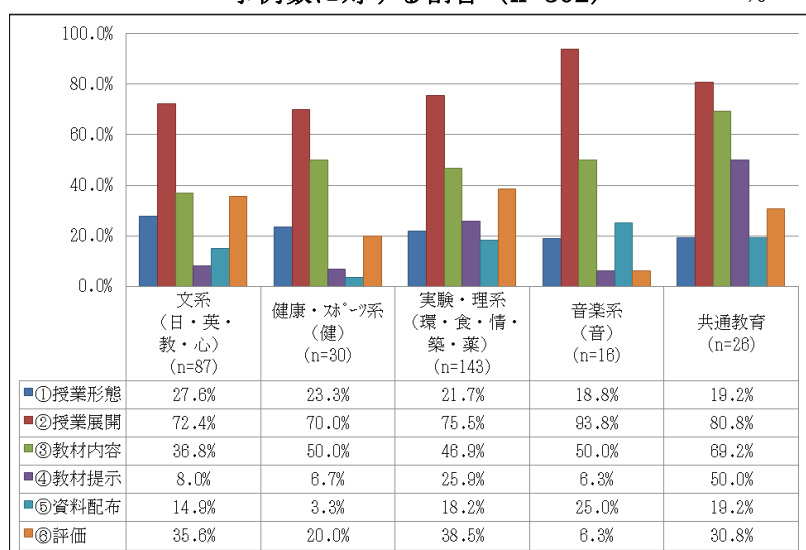
工夫のカテゴリ	文系 (日文・英文・ 教育・心福)	健康・スポーツ系 (健康・スポーツ)	実験・理系 (環境・食物・情報・ 建築・薬学)	音楽系 (音楽)	共通教育
①授業形態	24	7	31	3	5
②授業展開	63	21	108	15	21
③教材内容	32	15	67	8	18
④教材提示	7	2	37	1	13
⑤資料配布	13	1	26	4	5
⑥評価	31	6	55	1	8
工夫のカテゴリ計	170	52	324	32	70
事例数計	87	30	143	16	26

カテゴリ出現数に対する割合 (n=648) %



事例数に対する割合 (n=302)

%



開講学科を文系、健康・スポーツ系、実験・理系、音楽系、共通教育系の5つの領域に分けた結果が図表 2-4 である。領域によって、工夫のカテゴリの割合に差が見られる。「授業展開に関する工夫」はどの領域においても多いが、「教材内容や提示に関する工夫」、「資料配布に関する工夫」や「評価に関する工夫」については領域間で量的に差がある。

また同じ領域に複数の学科を含んでいる。例えば文系であれば文学・言語系の学科から教育・心理系の学科までが含まれており、学科レベルに分けると更に違いが大きいと予想される。そこで、学科別の工夫については次節で改めて詳細を整理することとする。

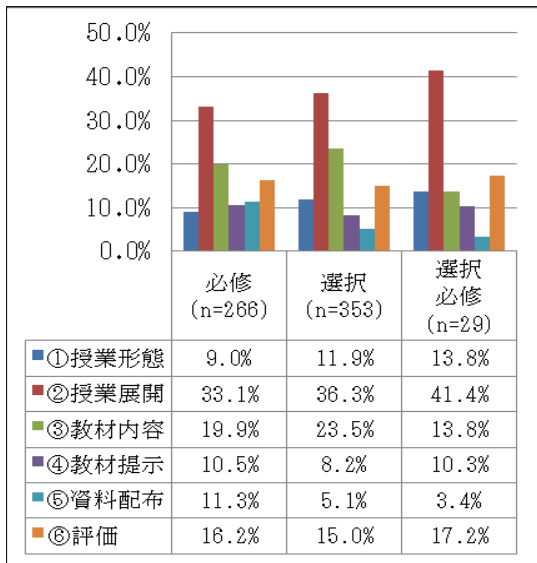
(4) 必修科目、選択科目、選択必修科目別状況

図表 2-5 必修・選択・選択必修科目ごとの工夫の
カテゴリ分類 (複数回答)

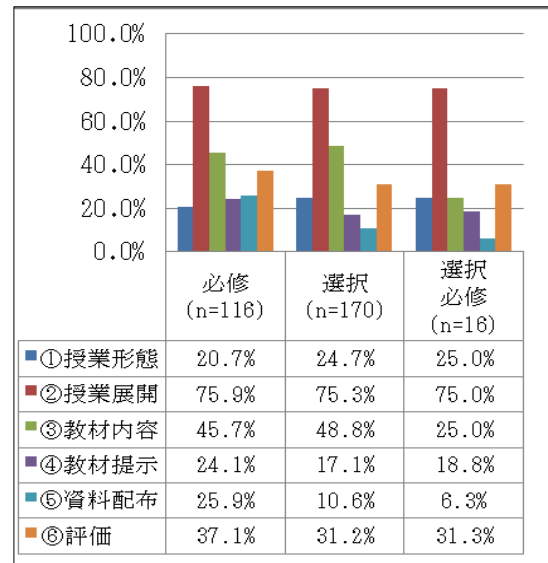
件

工夫のカテゴリ	必修	選択	選択必修
①授業形態	24	42	4
②授業展開	88	128	12
③教材内容	53	83	4
④教材提示	28	29	3
⑤資料配布	30	18	1
⑥評価	43	53	5
工夫のカテゴリ計	266	353	29
事例数計	116	170	16

カテゴリ出現数に対する割合 (n=648) %



事例数に対する割合 (n=302) %



必修、選択、選択必修科目別に工夫のカテゴリを分類した結果が図表 2-5 である。「授業展開に関する工夫」の割合は選択必修、選択、必修科目の順に多いが、「資料配布に関する工夫」はその逆の必修、選択、選択必修科目の順になっている。また「評価に関する工夫」は、前述の開講学科の領域間に比べて差は小さかった。

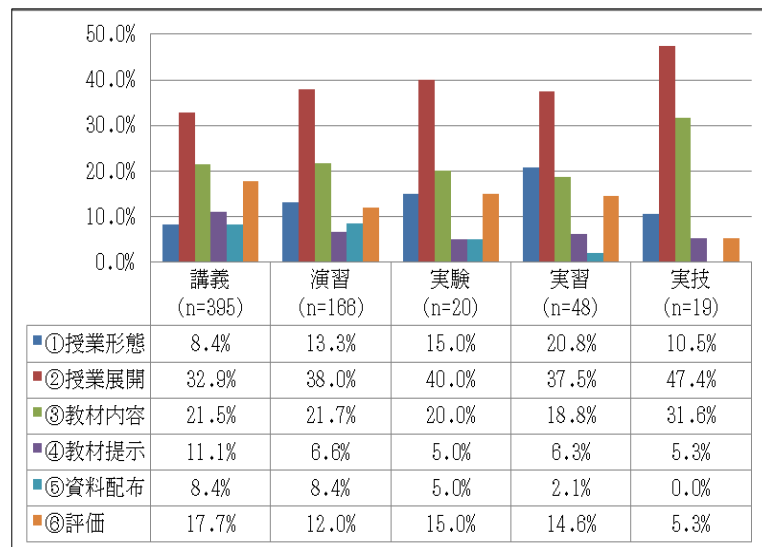
但し、学部学科によって必修、選択、選択必修それぞれの科目数の割合に違いがあり、図表 2-5 の結果が、そのまま必修、選択、選択必修科目の特徴を表しているとは言い切れない。

(5) 科目の形態（講義、演習、実験、実習、実技）別状況

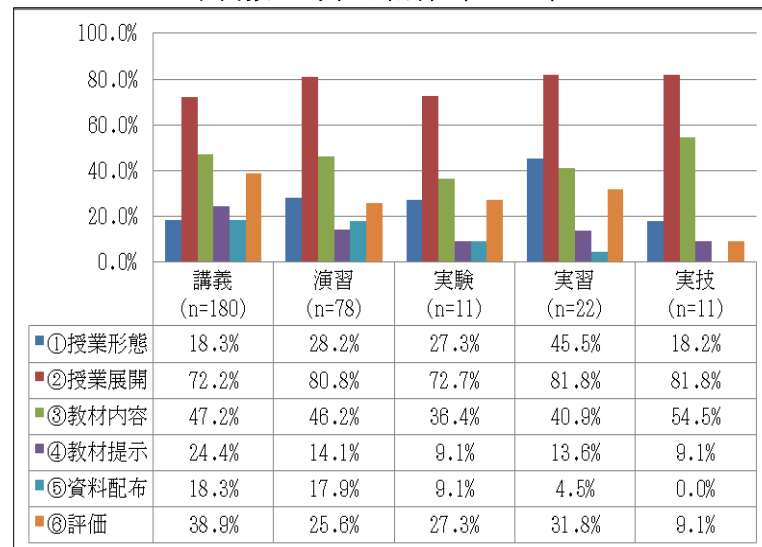
図 2-6 科目の形態ごとの工夫のカテゴリ分類（複数回答） 件

工夫のカテゴリ	講義	演習	実験	実習	実技
①授業形態	33	22	3	10	2
②授業展開	130	63	8	18	9
③教材内容	85	36	4	9	6
④教材提示	44	11	1	3	1
⑤資料配布	33	14	1	1	
⑥評価	70	20	3	7	1
工夫のカテゴリ計	395	166	20	48	19
事例数計	180	78	11	22	11

カテゴリ出現数に対する割合 (n=648) %



事例数に対する割合 (n=302) %



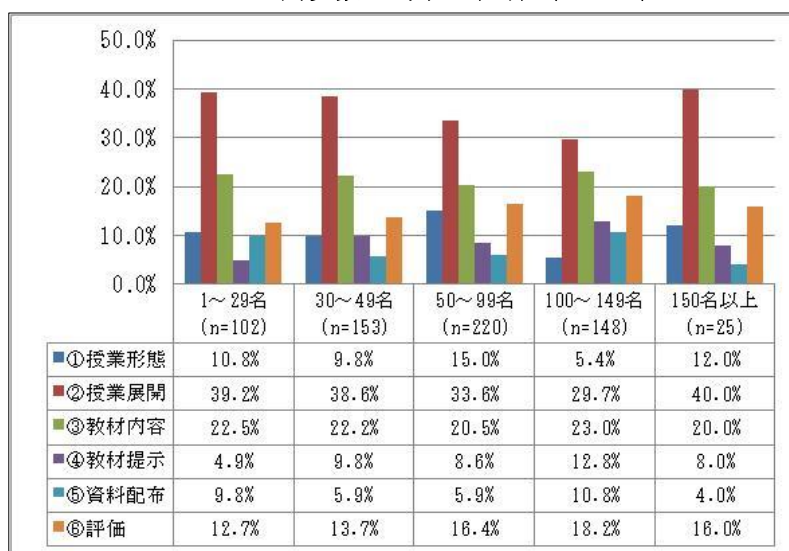
講義、演習、実験、実習、実技という科目の形態による工夫のカテゴリ分類は、図表 2-6 の通りの結果となった。「授業展開に関する工夫」は、科目の形態に関わらず多く取り入れられていることと、「教材内容に関する工夫」はどのような科目形態でも一定数以上の科目で取り入れられている。それ以外のカテゴリの工夫については科目の形態によって差がみられる。例えば、「授業形態に関する工夫」は演習科目や実験・実習科目に比べて講義や実技科目での取り組みが少ない。また講義科目で「評価に関する取り組み」が多いのに対して、実技科目では少なかった。

(6) 受講者数別状況

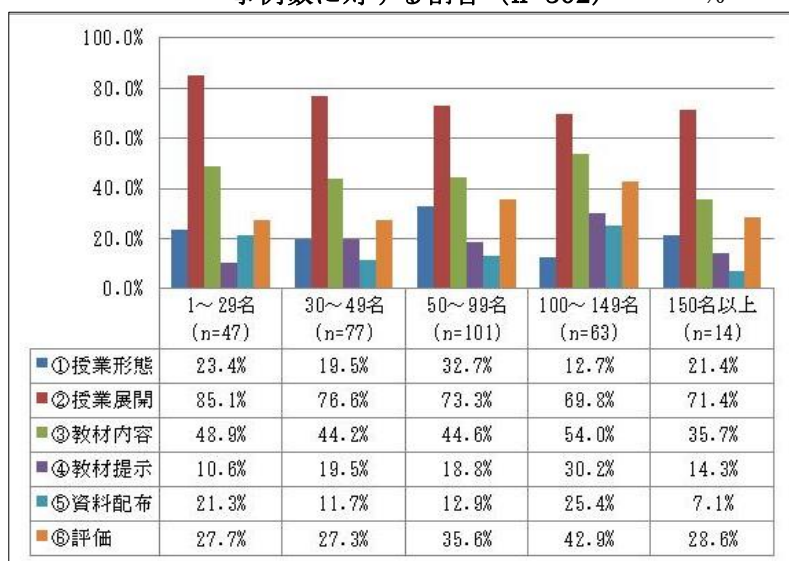
図表 3-7 受講者数ごとの工夫のカテゴリ分類 (複数回答) 件

工夫のカテゴリ	1～29名	30～49名	50～99名	100～149名	150名以上
①授業形態	11	15	33	8	3
②授業展開	40	59	74	44	10
③教材内容	23	34	45	34	5
④教材提示	5	15	19	19	2
⑤資料配布	10	9	13	16	1
⑥評価	13	21	36	27	4
工夫のカテゴリ計	102	153	220	148	25
事例数計	47	77	101	63	14

カテゴリ出現数に対する割合 (n=648) %



事例数に対する割合 (n=302) %



受講者数が増えると、「授業展開に関する工夫」は減り、「教材の提示方法に関する工夫」は増える傾向がある。それ以外の工夫については数量的な結果からは大きな特徴は見られない。なお、受講者数 30 名未満の事例 47 件の内 30 件が演習科目であり、100 名以上の事例 77 件の内、75 件は講義科目であった。よって受講者数だけでなく科目の形態による工夫の特徴も反映していると考えられる。

(7) 取り組みのポイント別状況

先生方に事例の作成を依頼する際に、それぞれの工夫に取り組んだ際、最も力を入れたポイントを以下の項目から選んでチェックしていただくように伝えていた。結果的に、複数の項目にチェックされた事例が多くなったが、取り組みポイントごとに工夫のカテゴリ分類すると、図表 2-8 のような結果となった。

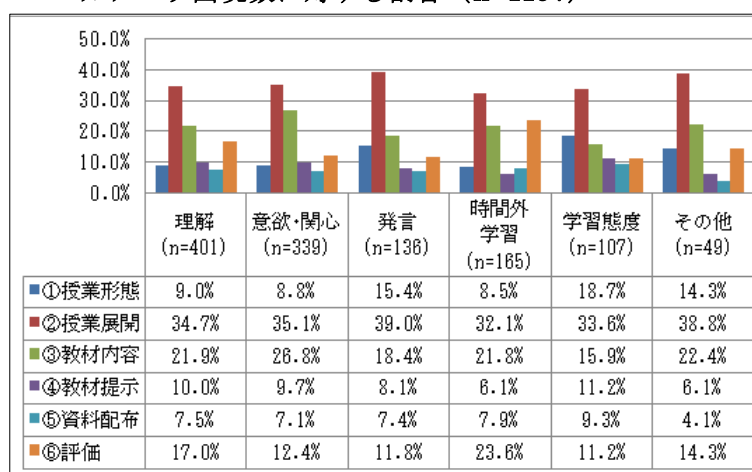
〈取り組みポイントの詳細〉

- 理解を深める取り組み ○意欲・関心を高める取り組み ○発言を促す取り組み
- 時間外学習を促す取り組み ○学習態度を良くする取り組み ○その他

図表 3-8 取り組みポイントごとの工夫のカテゴリ分類（複数回答） 件

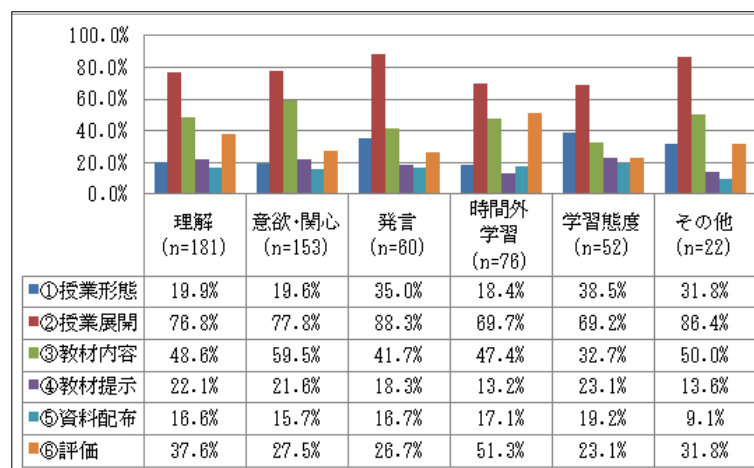
工夫のカテゴリ	理解	意欲・関心	発言	時間外学習	学習態度	その他
①授業形態	36	30	21	14	20	7
②授業展開	139	119	53	53	36	19
③教材内容	88	91	25	36	17	11
④教材提示	40	33	11	10	12	3
⑤資料配布	30	24	10	13	10	2
⑥評価	68	42	16	39	12	7
工夫のカテゴリ計	401	339	136	165	107	49
事例数計	181	153	60	76	52	22

カテゴリ出現数に対する割合（n=1197） %



事例数に対する割合 (n=544)

%



「理解を深める取り組み」としては「授業展開に関する工夫」が最も多く、次いで「教材内容に関する工夫」、「評価に関する工夫」が多かった。

「意欲・関心を高める取り組み」では「教材内容に関する工夫」が他の取り組みポイントに比べて多いのが特徴である。具体的な記述内容を見ると、「学生にとって身近で、学習内容に興味を持ちやすいものを教材としている。」というような事例が多くみられることからそのことが伺える。

「発言を促す取り組み」では「授業展開に関する工夫」が特に多い。60件の事例の内、53件の事例で記述があったが、その内容を見ると、個別学習→課題解決学習としてのグループワーク→グループディスカッション→グループ発表というような流れの中で学生が主体的に授業に参加し、意見交換を経て考えをまとめて発表するといった機会が計画的に準備されていることがわかる。

「時間外学習を促す取り組み」では「教材内容に関する工夫」や「評価に関する工夫」が多い。実際の記述内容を見ると、授業内容のポイントを押さえた教材により予習・復習を促し、課題レポートやノート提出により学生の理解度を確認し、成績評価に加味されていることがわかる。

「学習態度を良くする取り組み」については、様々な工夫がバランス良く行われているようであるが、他の取組みポイントにはチェックが入らず「学習態度を良くする取り組み」単独の取り組み7科目の内、5科目で座席指定や出席確認に関する工夫が記載されており、授業に取り組む態度と意識づけの重要性が伺えた。

「その他の取り組み」の、全22件の内容を具体的にあげると「小学校や幼稚園、保育園等の教育現場での実践力を高める取り組み」や、「芸術・美術関係の最新情報を出来る限り速やかにリアルに提示するための環境面での工夫」、「様々な効果を同時に追求するための工夫」等が見られた。

このように、対象事例科目に付随する諸条件で分けた場合の工夫の傾向（6つのカテゴリ）の概要を見ると、学科単位のカリキュラムにもとづいて行われている大学教育は、教育内容や方法等についても学科による違いが大きいことがわかる。

よって次に、学科ごとの工夫の特徴を整理する。

3. 学科による工夫の特徴について

工夫の6つのカテゴリにおける記述内容について学科ごとに分けて整理する。なお、音楽学部と薬学部については事例の集約を学部単位で行ったことを受けて、学部単位でまとめる。

(1) 日文〔文学部日本語日本文学科（大日）、短期大学部日本語文化学科（短日）〕

【まとめ】

分析対象の事例数が少なく学科全体の傾向を示しているとは言い切れないが授業展開や授業形態に関する工夫を中心に、授業内容の定着を図るための取り組みがされている。

【自由記述の整理】

◆授業形態に関する工夫

- 初回授業で実力テストを実施し、1学年100名の受講生を複数の少人数別クラスに分割。テストの際に回答させた学生の関心のあるテーマ毎にクラス編成する。(短日)

◆授業展開に関する工夫

- 学生自身に古文の現代語訳に取り組みさせた後での個別指導
- 間違いが多い箇所の重点解説
- 予習を徹底した反転学習に基づいたゼミ指導の展開
- ICT活用により授業中の学習自体をシステム化して学生が個々のペースで学べるようにし、教員はそれに合わせて全体説明と個別対応で柔軟に対応。

(2) 英文〔文学部英語文化学科（大英）、短期大学部英語キャリア・コミュニケーション学科（短英）〕

【まとめ】

大英・短英共に開講科目の多くが演習科目であることを反映し（2015（平成27）年度：大英59.2%、短英81.5%）、工夫事例も演習科目が目立つ。工夫については、授業形態・授業展開・教材・資料・評価と幅広く行われている。学生の意欲・関心を高め、主体的な学びを推進する為の手立てとして、多くの科目においてグループワークやプレゼンテーションが取り入れられている。また、授業内容の定着を図り、理解を深める為の取組みとして、予習課題や小テスト、レポート提出等を実施し、評価に反映される形になっている。さらに、それらを組み合わせて授業全体の構成・展開としての工夫が行われている。

【自由記述の整理】

◆授業展開に関する工夫

- 双方向授業の導入
 - ・毎回テーマを与え、学生が挙手して意見を述べる（プレゼン点を与える）。
 - ・マイクを回して学生間で発表と意見交換を行う。担当者からもコメントする。
- グループ学習、プレゼンテーションの導入
 - ・短編教材を個人で翻訳→グループ討論→グループ発表
 - ・ペアワーク、ピアサポートの導入
 - ・小グループによるプレゼンテーション

- ・ソロ、ペア、グループの3タイプでスピーチ練習（短英）
- 模擬授業（教師役と生徒役の分担）
- 授業内容の定着を図る（時間外学習の促進）
 - ・事前学習でテキストの精読
 - ・辞書使用による予習の徹底
- 能力向上（スキル）
 - ・発音能力向上：音声矯正ソフトの利用、Skype²⁾での遠隔授業（ICT活用）
 - ・リーディングスキル向上：μ Cam¹⁾を用いた練習問題（ICT活用）。
 - ・ビジネスシーンでの英語運用能力習得：シャドーイング、リピーティング、ロールプレイ（短英）
- 3週ワンセットのユニット型学修（短英）
 - ・1週目：インプット→2、3週目：アウトプット

◆教材内容に関する工夫

- 講義ノート・練習問題および試験は全て英語で出題、回答。
- ライティング方法の工夫「freewrite」というライティング手法、授業外課題はパラグラフライティング)
- 原書教科書の活用
- 有名古典作品の読了
- ビデオ教材の導入
- 新聞やインターネットに掲載されている話題の記事の紹介（実践的英語教育）

◆教材の提示・資料の配布に関する工夫

- ICT活用

◆評価に関する工夫

- 発表に対するプレゼン点を与える（意欲・関心を高める）
- レポート課題（知識の定着、理解度確認）
- 毎回の予習課題に対する小テスト（知識の定着、理解度確認）
- テキストの内容をまとめてμ Cam¹⁾でテスト（ICT活用、理解度確認）
- スピーチに対する学生相互評価（短英）

(3) 教育〔文学部教育学科（大教）、短期大学部幼児教育学科（短教）〕

【まとめ】

開講科目の大部分を演習科目と講義科目が占めており（2015（平成27）年度で演習科目が大教44.0%、短教55.9%、講義科目が大教45.9%、短教30.9%）、対象事例も演習科目と講義科目のみであった。また大教・短教共に科目の90%以上が選択科目であることから、対象事例も必修科目5事例に対して選択科目34事例と、それを反映した結果となっている。また文系の他学科では「意欲・関心を高める取り組み」が多いことに比べ、教育では大学・短大共に「理解を深めるための取り組み」が最も多かった。

工夫の方法については、様々な手立てを組み合わせることで毎回の授業もしくは15回の授業全体の流れ・展開を工夫している事例が多く見られた。また、それぞれの工夫がその科目の内容について、受講生自身の理解を深めるための取り組みであると同時に、

学生に指導者としての視点を持たせ、自らが教育者となった際に必要な能力を育てることを意識した取り組みが目立つ。教育者養成学科の科目としては当然かも知れないが、このことは、学びを深化させ、専門知識を実社会で活用出来る力を育成していくためのポイントと考えられる。

【自由記述の整理】

◆授業展開に関する工夫

- 学生の興味・関心を促し、知識を深めるための様々な取り組み
 - ・授業終了時に今回の授業に関する感想、意見、質問などを記入させたミニツツペーパーを提出させ、次回の導入時にスライドを用いて回答・解説。
(意見の共有、知識・理解の深化、授業導入の工夫)
 - ・植物の栽培し、収穫するまでの一連の作業をグループで行わせ、教師のどのような言葉かけや働きかけが有効なのかを体験を通して学ばせる。
教材研究の側面も持つ。
 - ・受講人数が多く（150名）、昼休み直後の授業という状況で、自然に気持ちを落ち着かせ、授業に集中していく手立てとして絵本の読み聞かせをさせる。絵本は学級づくりや特別支援教育、心の教育に関わる内容のものを選んだ。
 - ・指導案作成、模擬授業とその振り返り、改善案の提示。
 - ・他の学生の工夫に気付かせる。
- 授業の展開に応じた個別学習、グループワーク（ディスカッション、課題解決）、プレゼンテーション等の導入（アクティブ・ラーニングの実践）
- ロールプレイ
- 知識習得後、実践による理解の深化
 - ・授業前半はDVDや記入式プリントを活用した講義型授業を行い、後半はワークショップ形式で小学校社会科の授業内容を教材化する。（短教）
 - ・知識として学んだ内容を同授業内に実体験してみる（短教）
- ポートフォリオの作成（短教）
- ワークシート活用（理解度確認・深化）（短教）

◆授業形態に関する工夫

- 様々な形のグループ学習の導入
 - ・ワークショップ
 - ・課外学習を含めたグループ活動。（活動成果を授業で発表する）。
 - ・体育室にて身体表現を伴うグループワークを行う。
 - ・グループを毎回ランダムに組み換える。（短教）

◆教材内容・教材提示・資料配布に関する工夫

- 小テストの後半に「質問・意見・感想」欄を作る。
- 近年の若手教員が苦手とする植物の飼育栽培を導入。
- 教職実践の構造性と機能性を踏まえた、教育行政及び教育法規・教育制度、学校経営等の位置づけを理解するための問題を作成(学生が考えながら解答できるに工夫)。
- 実際に使用するパソコンソフトと使用するテキストのバージョンをあえて変える。
- 学生が作成した実験レポートを集めた実験解説集「理科実験ネタ& コツ」を発刊・

配布。

- 手作りおもちゃの作成（保育教材研究として）
- ゲスト・ティーチャーより話題提供（近隣教育委員会との連携）
- 幼児教育に関する新聞連載の活用
- 学生が提出したワークシートの優れたコメントをまとめたプリント配布
- 班ごとに作成した食育便りを印刷し、他クラスに配布。
- ガイダンス時に評価基準を明示した 15 回分の予習課題を提示

◆評価に関する工夫

- 学生の発表に対する総評解説と学生による自己評価、相互評価（評価シート活用）
- 毎回、評価対象のレポート課題を課す。定期試験以外に学期末に集大成レポートも課す。
- 授業中の発表を学期末の成績評価の際のプラス材料にする。
- 個人レポートを成績評価に 20 パーセント分、配点する。
- 授業記録用紙を配布し、毎時間の授業内容と気づきを書きとめて提出させる。提出された用紙は、最後にまとめて表紙をつけて授業記録として返却し、その内容を振りかえりながら記載可能なレポート課題を課した。

（4）心福〔文学部心理・社会福祉学科（大心）、短期大学部心理・人間関係学科（短心）〕

【まとめ】

2015(平成 27)年度の開講科目に占める割合は、講義科目が大心 74.2%、短心 60.0%、演習科目は大心 14.6%、短心 35.0%であった。これを反映して対象事例の 25 件の対象事例の内、講義科目の事例が 20 件と全体の 80%を占め、残りの 5 件が演習科目の事例であった。

対象事例の工夫については「理解を深める」、「意欲・関心を高める」等の観点の取り組みが中心を占めたが、その為の具体的な工夫として特徴的なのは、授業の展開の中での工夫の仕方が多様であることである。学科内で「心理学」と「社会福祉」のいう 2 つの学問領域を有し、各領域の中でも多様な内容を含むことが工夫の状況にもあらわれていると考える。

【自由記述の整理】

◆授業展開に関する工夫

- 15 回の授業全体の展開
 - ・福祉教育プログラムの企画・立案の基礎力を身につける。
教科書・プリント学習→課題に対する小グループディスカッション→各グループ中間発表（発表資料完成へ）→グループ発表と評価（卒業生である社会福祉協議会の専門職員、銀行員による専門的評価と相互評価）→各自でプログラム修正案をレポートとして提出
- 毎回の授業における流れ・構成の工夫
 - ・講義内容の理解の深化を図るための演習の導入。個別演習、グループ演習、発表と意見交換とそれに対するフィードバック。
 - ・心理学英語文献についてグループで分担して英訳を行い、次の時間にクラス全員

分印刷・配布して振り返りを行う。

- ・授業開始 5 分はウォーミングアップの時間を設け、ニュース等で取り上げられた事案を紹介すると共に学生のもとにマイクを持っていき、複数名に意見を求める。
- ・「発表とは」「質問とは」というテーマでレクチャーを行い、発表時の心構えや質問することの意義を伝えた上で、パワーポイントを使用した発表の機会を積極的に設けた。
- ・研究発表や講義とワークを交互に行い、ゼミ生の卒論指導を進めつつ自己理解と相互交流を図る。
- ・毎時間、授業の後半部分で、授業で行った経験を振り返り、全ての内容をノートに書き記す。

○時間外学習の促進

- ・時間外学習を促す為に①事前学習と②事後学習の充実を図った。
 - ①事前課題をこなしておかないと、たとえ授業に出席しても、「ついていけない」ことに加え「グループメンバーに申し訳ない」状況となる。
 - ②個人学習（復習）とグループメンバー同士の作業が中心となる。

◆授業形態に関する工夫

- 出席簿順に約 5 名ずつで 1 班を作り、班ごとに英訳を行う。
- 習熟度別クラス開講（プレイスメントテスト実施）
- グループ学習
 - ・グループディスカッション
 - ・毎回違うメンバーとの授業の振り返り
- 教員が教室中を絶えず巡回し、歩きながら話す。
- 受講した毎回の座席位置を記入させる（短心）
(座席指定はせず、座る位置は受講生に自由に選択させ、受講した場所を記入させることで、出席が「匿名的」なものではなく当該講義のその時間に確かにそこで受講していたことを自覚させる。)

◆教材内容、教材提示に関する工夫

- 視聴覚教材及び写真やメッセージなど視覚に訴える教材の活用
- 実体験重視：①疑似体験ではなく、実際に地域の子どもたちやその保護者、地域住民、知的障がいを持つ利用者と支援員と実際に関わせる。
- 卒論に向けての指導：文献の書き方等についてのレクチャーと図書館でのゼミオリエンテーション。
- 質問の仕方についての指導
- レポート課題の工夫（インタビューか読書かどちらかのテーマを自分で選ぶ）

◆評価の工夫

- 授業中に 3 回小テストを実施し、各 15 点の配点。任意提出のレポートを最大 15 点で評価。レポートは小テストの出題範囲内を手書きでレポート用紙にまとめる。（小テストが 0 点でもレポートで挽回可）
- 必ず良い点と改善点を含めた形でフィードバック（競争心、意欲の向上）
- μ Cam¹⁾ を使った小テスト（ICT 活用）

○レポート提出、ノート提出

(5) 健康・スポーツ系領域：〔健康・スポーツ科学部健康・スポーツ科学科（新健）、短期大学部健康・スポーツ学科（短健）〕

【まとめ】

健康・スポーツの事例 30 件の内、講義科目に関する工夫が 13 件と最も多く、次いで演習科目の事例が 8 件であった。学科としての特徴である実技科目の工夫事例は 7 件にとどまった。工夫の具体的な内容としては、授業展開に関する工夫が多い。また教材の内容に関する工夫の割合が他領域に比べて多いことが特徴的である。

【自由記述の整理】

◆教材内容に関する工夫

○時間外学修の促進

- ・毎回の復習（予習）を促す「独自学修ノート」の作成を指示。
- ・課題図書を 2 冊あげてルーズリーフ一枚程度の感想を書かせる。
- ・「予習レポート」：授業内容を事前にまとめる課題

○ワークシートの活用

○授業の目的に応じた教材

- ・受講生が行っている競技種目の具体例をできるだけ多く使う。
- ・子どものからだの発育や運動技能の発達などに関連する図表を提示。
- ・高齢者を中心とした地域住民への支援活動を「週 1 回の運動教室」としてゼミの授業時間中に実施。
- ・教育実習先訪問時に撮りためた授業風景のビデオを導入。(場の設定、師範の仕方、教材の工夫、グループ学習の工夫、板書の工夫、子どもの反応などにカテゴライズして場面を区切って見せる。)
- ・教育実習時の指導案作成や模擬授業について、作成方法、作成例やよくない指導案の例を挙げる。
- ・異なった種目のニュースポーツを担当させ、自分たち以外の参加学生たちに対して、一講習会あるいは一大会を企画・運営するよう課題
- ・障がい者武道（柔道）の研修での方法を参考にオリジナルを加え、柔道の技術の理解度を上げる工夫。

◆授業展開に関する工夫

○双方向授業の導入（コミュニケーションの工夫）

- ・“対話的な講義”にする工夫
- ・大人数科目であるが、ワークシートに、『相互コメント制』を導入し、授業中は教員と学生、学生間の相互コミュニケーションの時間をとり、内容への関心を持たせることを目指した。
- ・学生に質問を投げかける際は氏名を呼ぶ

○実演

- ・教員による実演パフォーマンス（学生が問いかけに動きで参加できるような仕掛けを幾つか置いて、実際に動く中で理解させる）

○指導者養成を意識させるための展開の工夫

- ・フィットネス部門の専門資格取得のための学習をする傍ら、「からだ」「運動」「健康」をキーワードに加齢に伴う身体の変化や現在のフィットネス事情などを研究・レポート化し、相互に発表し相互理解させた。
- ・指導案を提出させ種目指導に際しての注意点について事前に議論する場を設ける。
- ・一年間の集大成の成果物はテキストや DVD を作成。研究発表には各グループが取り組んできた高齢者や運動教室に関連するデータでの分析などを実施し論文として発表。
- ・バレーボールの実技指導において「数多くボールを打たせ、それをレシーブさせる」こと、そして、実際のクラブ活動の現場に立っても困らない「最低限の技術指導に取り組んだグループワーク」を取り入れる（新健・短健）

○全 15 回の内、8 回をテキスト講読にあて、章ごとに 10 名ほどの報告者を決め、各章の要点を報告する。①自分が同感だと思った記述とその理由、②今まで受けてきた教育との比較検討、③教師になって授業を構成するとき重要としたいこと等を発表させる。後半は課題となったことを取り上げて講義する。

○通年科目の「初期演習」で前期終了までに後期授業の内容を説明する。夏休み中に資料作成（発表原稿）し、9 月提出（全員に印刷配布）。後期はプレゼンテーション能力を向上させることが目的。

○グループ(1 グループ 7～8 名)内でのペアを作り、自作した指導案を相互評価させ、修正した指導案をもとに次回授業で模擬授業を実施する。

◆授業形態に関する工夫

- 講義科目のアクティブ・ラーニング化
- 机上用の名札を作成し、毎回、常に机上に置くように指示
- 学生をグループに分け、グループごとに毎回指導者になる。
- 能力別に少人数グループに分けて実技指導
- 各授業の後半に、出来る学生と出来ない学生の少人数グループにして、協力して教え合う時間を与えた。（短健）

◆評価に関する工夫

- 独自学修ノートの定期的な提出
- 報告のレジュメの提出
- 学期の中間に理解度を確認する小テストの実施
- 確認テスト、課題レポート（レポート点）
- 健康ノート（体力測定などの振り返り、自己評価）

（6）環境〔生活環境学部生活環境学科（大環）、短期大学部生活造形学科（短生）〕

【まとめ】

対象事例 27 件の内、講義科目に関する事例が 13 件と最も多く、次に実習科目に関する事例が多かった。2015（平成 27）年度の開講科目を見ると、大環は全体の 98.0%を、短生は 78.6%を選択科目が占めており、対象事例 27 件の内、22 件が選択科目であったことに頷ける。また「理解を深める取り組み」を含む事例が 15 件、「意欲・関心を高め

る取り組み」を含む事例が 16 件とほぼ並んでおり、「時間外学習を促す取り組み」を含む事例が 10 件とこれに続いた。

工夫の具体的な内容としては、「授業の展開における工夫」が 20 件と、対象事例の大部分で実施されており。「教材内容の工夫や教材の提示に関する工夫」を行っている事例も 15 件と多かった。評価に関する工夫を行っている事例は 9 件であった。

【自由記述の整理】

◆授業展開に関する工夫

- 理解を深める、授業内容の定着
 - ・講義、次に演習、宿題といった順で易しい問題から次第に難しい問題に移りながら宿題の解答で理解度の確認を常に行う。間違いやすいところは次回に解説する。
 - ・実験授業を開講する際、同じ教員が同じ期に、実験授業と関連した講義とを担当し、実験で行った内容を講義で解説し、理解した上で実験授業に臨むようにする。
- スタジオ制の導入：課題ごとに学生のグループ学修の指導を担当する教員をローテーションする。
- 時間外学修の促進
 - ・宿題、復習、自由課題
 - 宿題：毎回、指示する宿題を次回の授業で提出し、添削して返却された課題はクリアブックにファイルし、ポートフォリオとして就職活動などに活用
 - 復習：毎回、提出された課題は教員が赤ペン添削して、合格、または再提出の検印を押し、再提出作品には不合格理由を一筆書いて、次回に必ず返却
 - 自由課題：授業中に指示した自由課題に取り組み、作品を提出した学生には、一作品につき 1 点ずつ加点する
- 課題・宿題の個人指導を授業中に行う。
- 1 コマの前半は講義、後半に実験・検討時間とし、実験では講義で学んだ内容に関する実験を実施する。いくつかのテーマは班ごとに発表（全員必ず発表）。（短生）
- カードリーダーによる 1 分単位の客観的な出席管理をもとに、効果的な指導を行う。（短生）

◆授業形態に関する工夫

- TA の活用
- 座席指定（集中力向上）
- 個別指導
- グループ学修

◆教材内容に関する工夫

- 実際の建築例を教材にしてイメージしやすいようにする
- 学生に読み聞かせの面白さを体感させる（自作の大型紙芝居を上演、学生にお気に入りの絵本を持参させ、書画カメラを使いながら読み聞かせを学生自身で行う）。
- 折板構造を折り紙で模倣させる。
- 教員の学会での経験(学会等での委員活動)を活用→社会で問題となっていること、求められていることを知り得ることができ、授業でそのような話題をちりばめる
- μ Cam¹⁾での動画教材の提供。教員及び助手が実際に縫っている様子を撮影したも

の、解説のためのイラスト、解説文、写真等実習・実演（裁縫・デザインなど）を動画撮影し、 μ Cam¹⁾ にのせる。（ICT 活用）

○マーケットリサーチを課題にする。

◆評価に関する工夫

○講義終了間際 5～6 分を使って、講義の感想、質問・疑問を A4 のフォーマット用紙に書かせ回収する。これを出欠の根拠ともする。

○アドビのイラストレーターで最終報告書作成（ICT 活用）

○毎回の実験レポートに必ずチェックと修正を入れて次回返却（授業前半は様式や書式等の基本的なこと、後半は考察などの科学的な思考を観点にチェック）

○ μ Cam¹⁾ 上に講義内容に関するコメントを入力させ、平常点に加味。（ICT 活用）

○各自の実験ノートを作成させ毎回提出。評価して返却。

○自由課題作品提出者には加点。

○専門分野の知識度を確認するための事前テスト（既に身に付けている知識の確認）：繊維に関する様々な用語（これから授業で頻繁に出てくるもの 60 用語程度を選定）を羅列し、よく知っていて簡単に説明できるものに○を、説明はできないが聞いたことがあるものに△を、更に○を付けた中でも詳しく知っている用語について説明。

○単元終了ごとに小テスト（理解度確認、知識の定着）（短生）

（7）食物〔生活環境学部食物栄養学科（大食）、短期大学部食生活学科（短食）〕

【まとめ】

対象事例 32 件の内、講義科目の事例が 24 件で、その内訳は大学が 20 件、短大は対象事例 4 件の全てが講義科目の事例であった。また必修科目の事例が 19 件、選択科目の事例が 12 件、選択必修科目の事例が 1 件であった。取り組みのポイントとして最も多いのは「理解を深める取り組み」を含むものが 22 件、「意欲・関心を高める取り組み」を含むものが 14 件、「時間外学習を促す取り組み」を含むものが 11 件と続く。

それぞれのポイントにおける具体的な工夫の内容としては、管理栄養士・栄養士等の専門職従事者の養成学科として、国家試験対策や、専門職に従事する為に必要な知識や、職業人として実践に繋がる能力・資質を育成するための工夫が目立つ。単に知識の詰め込みではなく、予習をもとにしたグループワークや発表、その内容を定着・深化させるためのレポート課題等を通じて、学生の主体的な学びを促す工夫がされていることがわかる。また一部の事例から、それぞれの科目の学科カリキュラム全体の中での位置付けや、関連する科目との連携を意識した工夫が行われていることが伺える。

【自由記述の整理】

◆授業展開に関する工夫

○理解の定着、深化、知識の活用

- ・別途開講している実習科目と講義の内容と連携させ、相互に補完。
- ・授業の導入時に復習時間を設定。模範解答を示して前回実施した授業の要点について説明。学生の理解度に応じて補足説明。
- ・各章が終わると国家試験過去問題を用いて確認授業を実施。学生に回答を求め理解度を確認。

- ・教科書に記されている内容が、実社会で役立てられるよう、また次年度に開講される臨地実習（学外実習）で対応できるように、実際の給食部門収支を計算するなど演習を実施。
- ・各班で得られた実験データを画面に表示させ、互いのデータを比較。考察の深化を図る。
- ・疾病の数は多岐にわたる。テキストは疾病ごとの縦の解説であるので、疾病の症候から横のつながりを思い起こさせ、適宜、質問を行う。
- 教師・学生間のコミュニケーション（双方向）
 - ・学生に近い位置まで移動して顔を見ながらやりとりをする。
 - ・実際の症例を用いた栄養カルテの導入。各項を学生が記載している間は教室内をラウンドし、直接アドバイス。
- グループ学修
 - ・グループ内で共通の目標を設定し、共に語り励まし合いながら行動変容にチャレンジ。目標達成のため、行動科学 PDCA サイクル等の手法を用い、苦勞しながらも工夫して自分たちの問題を解決する能力を高める。更に問題や疑問について自分で調べ勉強する態度及び自分の考えを他人に伝える能力を強化する。
- 時間外学修（予習・復習の促進）
 - ・学生の従属的予習、従属的復習の習慣ができるように、A4 用紙に加工技術や加工食品の 1 つに関し 4 項目のまとめ要項欄を横並びに作成し、縦の並びに 30 行の自主学習表を作成した。（短食）

◆授業形態に関する工夫

- 5～6 名の小グループによる課題に対する意見交換。
- 課題の内容が似ている者でグループ構成。
- 実験実習途中で班編成を変化させ、学生の動向を観察する。
- 具体的な事例（患者さん等）を基にした小グループワーク。
- 図書館のアクティブ・ラーニングスタジオを利用し、机の配置はセミナー型ではなく、アイランド型に配置するなど、学生がより発言し易いような工夫。

◆教材内容に関する工夫

- 理解の定着、深化、活用
 - ・重要語句等を空欄とした講義資料について、ホームページ上の資料を読みながら穴埋めし、予習して講義に出席するように指導。
 - ・各章が終了した時点で国家試験の問題を例示し、学生に問題の解答を考えさせる。
- 興味・関心を促す（イメージを湧かせる）
 - ・具体的な事例の紹介
 - ・各授業テーマにふさわしい NHK エコチャンネルの動画を見せる（ICT 活用）
 - ・症例を用いた演習の導入
 - ・体組成、体力、生活習慣等で修正すべき自己課題を抽出させ、当事者意識を持たせる。
 - ・有名人の事例を用いて各疾患を印象づけ、興味を持たせる。（短食）
- 留学前に欧米式の授業形式に慣れさせる目的で、日本語と英語を用いた双方向式の

授業を導入。

○レポート作成法の習熟

- ・見やすく読みやすい報告文をどのように書くのかを理解、体験するために「手書き」レポートのみを提出方法に指定。

◆教材提示に関する工夫

○ICT活用

- ・パワーポイントを使用。できるだけ写真で見せるよう工夫。
- ・プロジェクターの活用
- ・ホームページを立ち上げ、教科書には掲載されていない最新情報の提供。
- ・実験室がマルチメディア化していることを活用
 - ①実験計画をスキーム化し、画面にて提示した。②実験手技を画面写真で説明し、実際の流れや動きを示した。③各班で得られた実験データを画面に表示させ、互いのデータの比較。
- ・栄養士、管理栄養士にとって、関わりの深い疾患である生活習慣病（糖尿病、高血圧、脂質異常症など）は、イラストを豊富に用いたパワーポイントで説明。

○実物提示

- ・実物を実際に手にとって観察（短食）
- ・身体測定で使用する器具や実際に提供している食事形態、現場で使用している栄養剤のサンプル等を見せ、測定方法やどんな時に用いるのかを説明（短食）。

◆資料配布に関する工夫（ICT活用）

- 講義日程並びに講義資料を事前にホームページ上から配信し、各自ダウンロードして印刷持参させる。
- 配布資料やパワーポイントをホームページやネットワークフォルダからダウンロードして利用できる。

◆評価に関する工夫

- 小テスト（毎回授業開始時、授業4回終了ごと、）
- レポート（全レポートを提出した場合のみ評価することを明示）
- 自己評価や学生相互評価の導入（客観性 傾聴力 モチベーションの向上）
- チューターによる評価（客観性 傾聴力 モチベーションの向上）

（8）情報メディア〔生活環境学部情報メディア学科（大情）大学のみ〕

【まとめ】

大学のみで学科であり対象事例は11件であった。内訳は講義科目の事例7件と演習科目4件で、必修科目5件、選択科目6件である。取り組みポイントに含まれるのが最も多いのは「意欲・関心を高める取り組み」であり、同じ生活環境学部内でも食物栄養学科等の資格系学科との違いがあらわれている。実際に取り入れた方法としては「授業展開に関する工夫」が多いがその中でも、視聴覚教材やスマートフォンの活用やブログ、e-learningシステム、 μ Cam¹⁾等、ICTが活用されているのが特徴である。

【自由記述の整理】

◆授業展開に関する工夫

○ICT 活用

- ・スマートフォンの活用（学生がスマホを使ってクイズやアンケートに答える）で双方向
- ・マルチメディア教室使用。プレゼンテーションの参考例 TED³⁾ の視聴、テーマに関する DVD の視聴。
- ・ブログボードに加えて手書きのメッセージシートを準備。毎回学生から質問や相談を受け付け、次回授業時に回答。
- ・問題演習の実施に独自の e-learning システムを立ち上げて μ Cam¹⁾ と併用。

○意欲の向上

- ・90分の授業の中に、雑談の息抜き時間を入れる。

○知識の定着、理解の深化

- ・講義・例題説明の後、授業時間内で解答できる練習問題を2題解き、隣の席の学生と答え合わせ。練習問題以外におまけ問題を宿題にする。問題の視点や面白さについて座席付近の学生同士で議論。
- ・小テスト→前回の復習（演習課題）→座学→今回の演習（前方での実演&各自で手を動かして確認）という授業展開。
- ・授業の後半30分間で各自ノートを作成してもらい、自分自身で振り返りを行うことを習慣づけた。ノートは毎週コメントをつけて返却し、そこに書かれていることについて次週取り上げる。
- ・学生たちが論理的にディスカッションを行えるようにファシリテートする。

○PBL

- ・課題（協賛企業が抱えている問題）に対して、学生がグループワークを通して、それを主体的に解決していくというスタイルで授業。
- ・グループワークで課題解決に向けてのマーケティング戦略の提案。
- ・毎回課題を出し、学生のプレゼンテーションをもとにディスカッション。

◆授業形態に関する工夫

- 180名を2つに分けて1クラス90名で実施。
- 座席指定：隣が別のクラスの学生になるように工夫
- 色々な学生と話をするように学期内で座席変えを3回実施

◆教材内容に関する工夫

- ブログボードに寄せられたメッセージを授業中に閲覧しながら学生の理解状況の参考にする。
- 「日々のアンケート」と称するA4判の質問・感想アンケート票を配布
- 学生と、外部の世間（企業・地域・社会）とのもっとも身近な接点として、コンビニ（コンビニエンス・ストアチェーン）というインタフェイスを取り上げる。
- 学生にとって取り組みが比較的容易なマーケティング・社会調査に絞り、なお且つ実際に店舗と地域を訪問するフィールドワークの手法を採用。

◆教材提示に関する工夫

- 翌週までにはほぼすべての質問に対して詳細な解説をほどこし、感想にもコメントをつけ、再掲した質問文や感想文の筆者は匿名にして μ Cam¹⁾ にアップロードして全

員で共有する。

○スライド説明をしながら各自で手を動かして動作を試してもらう

○講義が終了後にその単元のスライドをオンラインコースにアップし、復習に活用。

◆評価に関する工夫

○協賛企業の方も再び授業に参加し、学生の最終プレゼンで最も説得力のある提案をしたチームを発表してもらうコンペ形式

○小テストの（多肢選択問題を中心とする 10 問で、手書きのノートのみ持ち込み可とし、評点のうち 50 点をここから与える。

（9）建築〔生活環境学部建築学科（大築）大学のみ〕

【まとめ】

建築学科では例年講義科目は開講科目の約半数を占めているが、対象事例 14 件の内訳は、講義科目の事例が 10 件と大半を占めた。また、14 件全てが必修科目であった。取り組みのポイントについては「理解を深める取り組み」を含むものが 13 事例と圧倒的に多かった。

本学の建築学科は学部 4 年と、大学院建築学研究科（修士）2 年の 6 年一貫教育カリキュラムとなっており、これは、JABEE⁴⁾ 認定により UNESCO-UIA 建築教育憲章対応プログラム⁵⁾ として国際的に認定されている。今回の対象事例は学部の比較的低学年の授業に関する事例が多かったが、高学年及び大学院での更に高度で専門的な学びに対応出来る知識と能力を確実に育成するための工夫が徹底されていることが伺える。

具体的な工夫の内容を見ると、授業形態、授業の展開、教材内容や提示方法、資料配付、評価等について多様な工夫がバランス良く取り入れられている。

【自由記述の整理】

◆授業展開に関する工夫

○講義とフィールドワークの関連付け

○理数系科目の時間外学修の促進（毎回小テスト→宿題）。専門知識の定着。

○毎回、自由記述による授業アンケート実施→次回以降の授業に反映、改善。

○目的に応じて身近な建築物や家具による実験、実習。学生の自主的な作業、演習時間の重視。

◆授業形態に関する工夫

○座席指定

○グループ分けして受講者全員が実験に確実に参画できるよう配慮。各班の作業に時間差を設ける（集中力の維持）。

◆教材内容・資料配付に関する工夫

○手作り模型

○重要な建築図面や写真、地図などのプリントを配布

○テキストを毎回プリントで配布

○練習問題は答えも事前に配布

○書き込みノート式プリント配布

◆評価に関する工夫

- 毎回の小テストとフィードバック（学生の知識の定着及び論理的思考能力の向上）
- 2回に1回の割合で小テストの実施と採点した小テストの返却
- 講義の内容に関する論述式の小テスト
- 授業開始15分間は、毎回2～4問の小テスト（10点満点）を実施（理解度確認）
- 演習の間、各学生が理解しているか確認して回り、分かっていない場合は個別指導。

(10) 音楽〔音楽学部演奏学科（大演）、音楽学部応用音楽学科（大応）大学のみ〕

【まとめ】

音楽学部は、演奏学科（大演）、応用音楽学科（大応）の2学科を有するが、学部単位で事例を依頼、集約しているため分析も学部単位で行う。しかし学科による特徴が見られた部分については分けて示す。

対象の16事例の学科内訳は大演、大応各8件ずつであった。科目の種別による内訳は、演習科目9件、実技科目4件、講義科目2件、実習科目1件で、選択科目9件、必修科目7件であった。取り組みのポイントでは「意欲・関心を高める取り組み」を含む事例が10件、「時間外学習を促す取り組み」を含む事例が8件と続いた。声楽や楽器演奏等、実技科目が多い学部であり、学生の主体的な学びと、授業外の時間における自主学習・練習の重要性が伺える。また他の領域の学科においても「授業の展開に関する取り組み」が最も多いのは変わらないが、音楽学部はその傾向が特に強いという結果が出た。

【自由記述の整理】

◆授業展開に関する工夫

- 大演：個々の学生に応じた個別指導の徹底
音楽館ホールでの発表演奏
- 大応：
 - ・毎回課題を出し、その評価と課題の解説を授業後半に実施。
 - ・スマートフォンの動画撮影ツールと、マインドマップアプリを使用（ICT活用）
 - ・学生自身が記録した音楽療法の実習記録（記述文章）の計量分析の手法
 - ・最終回に成果発表会
 - ・授業中のスマホ禁止明示

◆授業形態に関する工夫（大応のみ）

- グループワーク、ペアワーク

◆教材内容の工夫（大演に多い）

- イタリア語についてのリピート学修（音楽のようにリズムを感じながら学ぶ）
- 人体（発声に直接かかわる部位）の図解を用いたり、効率的かつ有用な身体訓練（意識付け）を行ったりする。
- 個々の学生に応じた課題の提示

◆資料配布に関する工夫

- リズムパターンを記載したプリント
- 楽譜作成ソフト finale[®]を用いて、明治時代以降の童謡・唱歌等楽譜のデータベースを作成。授業で活用できるよう、μCam¹⁾のコースにリンクを設けた。（ICT活用）

◆評価に関する工夫

○最終回における各グループの発表内容について学生相互に評価。

(11) 薬学〔薬学部薬学科（新薬）、薬学部健康生命薬科学科（大康）大学のみ〕

【まとめ】

薬学科（新薬：6年制）と健康生命薬科学科（大康：4年制）の2学科を有しており、対象事例は新薬の科目が42件、大康の科目が17件であった。

①薬学科（新薬）

2015（平成27）年度の開講科目を見ると、講義科目占める割合が67.7%、必修科目が63.0%であるが、対象事例42件の内、34件が講義科目、残り8件は実習科目の事例であり、必修科目の事例が36件であった。

取り組みのポイントとしては、「理解を深める取り組み」を含む事例が34件と、次の「意欲・関心を高める取り組み」を含める事例14件の倍以上となっている。このこと背景には、6年制教育となった薬学科においては学習範囲も拡大するなかで、学生の学力差に対応し、専門的な知識を確実に修得させる教育が必須であることや、全国的に合格率が低下傾向にある薬剤師国家試験対策の充実が急務であるという事情が伺える。

具体的な工夫の内容を見ると、様々な方法を用いて徹底して理解を定着、深化させることに重点が置かれていることがわかる。配布資料やパワーポイントだけに頼らず、重要ポイントの板書の工夫も複数見られる。また、学生が自主的、主体的に問題に取り組み、相互に協力しあって課題解決を行うことが出来るような授業環境や教材を準備することや、配布資料について工夫し、毎回の授業を重ねることで確実に学びを深化させていくための効果的な予習・復習を盛り込むなど、授業全体の展開の中で総合的な工夫が行われていることが特徴である。更に、高度な専門性と職業人として求められる実践力を育成するための工夫など、明確な目標を設定しそれを達成するための学生のモチベーションを高める工夫が行われている。

②健康生命薬科学科（大康）

2015（平成27）年度の開講科目を見ると、講義科目占める割合が69.6%と新薬と同様に多くを占める。但し、選択科目が全体の65.6%と新薬とは異なる状況である。対象事例17件の内、11件が講義科目、次いで演習科目が4件、実験科目、実習科目がそれぞれ1件ずつであった。また必修科目の事例が8件、選択科目の事例が9件というのも新薬とは異なる結果となった。

取り組みのポイントとしては、「理解を深める取り組み」を含む事例が12件、続いて「意欲・関心を高める取り組み」を含める事例が8件と続いた。

具体的な工夫の内容を見ると、新薬と同様に高い専門性を修得するため、知識の定着と深化を図る取り組みが多いが、6つのカテゴリの工夫がバランス良く配置されており、特に専門分野の内容について、学生にとって身近で興味・関心を喚起させるような教材の工夫に重点が置かれていることが特徴的であった。

【自由記述の整理】

①薬学科（新薬）

◆授業展開に関する工夫

- 講義でわかりにくかった箇所を紙に書いて提出してもらい、次の講義で補足。
- 時間外学修（予習）の徹底。授業中の課題と毎回サブノート提出。講義内容の確認テストの実施と成績が良くない学生への個人面談（生活面も含めた指導）。
- 学生間の教え合い。15回の授業の内4回は演習日とする。グループメンバー全員が理解することを目標とする。
- 暗記箇所やポイントを具体的に示し、短時間でも毎時間の復習を行う習慣をつける。「記憶に残る！問題がとける！」という成功体験をさせる。
- 予習・復習の手順や方法について具体的に指示し、確実に実行させる。
- 確認試験の欄外に各自の要望を記入させ、次回以降の講義に反映。
- 重要な部分については、声をそろえて全員に読ませて印象付けをする。
- 授業外での時間外学習を促す取り組みとして、サブノート（復習ノート）作成・提出を義務づけた。
- 学習の早い段階での動機づけに加え、実際の現場を意識させた学習・演習を繰り返す試み
- 共通する重要事項が関連する問題を時間内に解けない学生には、マンツーマンで説明し、何を優先的に理解し覚えるか、ポイントを整理させた。
- 講義開始時に必ずこれまでの講義全ての復習を実施。最終講義に近づくほど時間がかかるが、反復学習の重要性を伝える方法を実践した。

◆授業形態に関する工夫

- グループ学修、発表、まとめ
- 習熟度が低いとされる学生を対象に、少人数制、双方向授業の実施
- 実験時の学生の役割分担の徹底（必ず全員参加の体制）

◆教材内容・提示に関する工夫

- 動画、写真、図解を主体としたスライドを作成し、視覚化。
- パワーポイントによる講義を減らし、板書を行うことで思考を誘導して毎回ミニレポートを作成させる。
- 実習前に実習の進行スケジュールを板書しておく・
- 授業内容をまとめたプリントを全員に配付し、重要項目については板書を多用。
- パワーポイント教材を使用
- 学生のニーズにあったオリジナルプリント
- 書き込み式プリント
- スライド提示
- 毎回、講義内容に即した演習問題を配布し、復習する際の重要ポイントを示す。

◆資料配布に関する工夫

- μ Cam¹⁾上に演習問題アップ（ICT活用）
- 重点事項はプリント配付
- 国家試験問題の配付

◆評価に関する工夫

- 小テストによる評価
- 毎回授業の冒頭で確認試験
- レポート（宿題）
- 中間・定期試験後に間違いの多い問題の解説
- 口頭試問の導入
- 確認テストの結果のデータ解析をもとに学生の不得意部分の把握

②健康生命薬科学科（大康）

◆授業展開に関する工夫

- 重要項目の回にはレポート課題に取り組みせ、時間をかけてじっくり理解させる。
- 定期的に小テスト実施（理解度確認）。その内容を宿題としてレポート提出。添削して返却。
- 授業開始時に確認テストを実施し、疑問点を放置させない。
- コンピュータを用いた実践を積極的に導入。（基礎から臨床、医薬品開発への繋がりを総合的に理解し、習得した知識や技能を活かせるようレベルアップをはかる）
- ディスカッションの時間を取り学生同士で説明、討論→発表とフィードバック。
- 学期初めに科目の重要性と実用性を強調し、共通認識させる。

◆授業形態に関する工夫

- グループ学修、発表、まとめ
- オムニバス形式で専門領域の概略を講義（1年前期科目）
- 全員を3チーム編成とし、各チーム毎に共同で一つの課題を演習方式で討論、資料収集、成果のまとめ・発表を行う。

◆教材内容・提示に関する工夫

- パワーポイント教材を使用
- DVD視聴、ICT活用
- 実物提示
- デモンストレーションの実施

◆評価に関する工夫

- 小テストによる評価
- 毎回授業の冒頭で確認試験
- 期末テストは総論の基本的な部分と、各論の各自の発表や自己学習をもとに記述する部分を半々にした。

(11) 共通教育（共通教育部、共通教育科）

【まとめ】

「共通教育科目」は、大学・短大、学部・学科、学年に関係なく、興味や関心に応じて選択・受講することができる科目であり、幅広い教養と豊かな人間性を育む為、あらゆる分野にわたる科目が開講されている。

対象事例 26 件の内、講義科目が 20 件と多くを占めたが、取り組みのポイントとしては「意欲・関心を高める取り組み」を含む事例 18 件と最も多く、これは共通教育科目

の特徴を反映した結果であると考える。

具体的な工夫の内容としては「授業展開に関する工夫」、「教材内容もしくは提示に関する工夫」が多く見られた。

【自由記述の整理】

◆授業展開に関する工夫

- 学科・領域や学年、習熟度の異なる学生の興味・関心を高め、自主的な学びを促す様々な取り組み
 - ・双方向授業（課題に対する質問を投げかけ、挙手して答える）
 - ・事前課題に対するグループワーク
 - ・ゲームを取り入れた毎回相手が変わるペアワーク
 - ・2分間スピーチ、グループディスカッション、コミュニケーションシート（翌週にフィードバック）
 - ・授業開始時のアイスブレイク
 - ・記録映像の導入、ビデオ視聴（事前に内容を周知）
 - ・視覚に訴える工夫（大学関係データ情報、新聞記事…パワーポイントや写真）
 - ・学生によるプレゼンテーション
- 導入・展開・まとめの目的に応じた授業展開の工夫、理解の定着
 - ・初回：講座の目的・進め方、最終目標について説明
 - ・毎回：座席指定、出席確認の時間帯にタイピング練習
前回復習、今回のポイント説明→プリントにそって今回の演習課題
机間巡視とヘルプコール対応
 - ・定期的なミニテスト
 - ・欠席者用資料（ネットワークフォルダに）

◆授業形態に関する工夫

- 座席指定
- ペアワーク、グループワーク、クラスワーク

◆教材内容に関する工夫

- 各回の授業内容をメモする部分とミニレポートを一体化したワークシート冊子の作成と配布。
- メモの情報を参照しないと書けないようなミニレポートや宿題課題。
- 生きていく上で、またキャリアを考える上で知っておいてほしい情報を毎回伝える。
- 自ら書き込む空欄の多いプリント
- 学生によるゲストスピーカー
- 正解のない問題を投げかけ、それについて話し合う。
- 情報 SA（スチューデント・アシスタント）の学生と協同して授業計画の立案および授業内容の見直し
- 新聞記事の活用

◆教材提示に関する工夫

- 学生レポートのスライド提示（情報共有）
- 文章だけではなく（理論的な話）、写真・図式などビジュアルなわかりやすさ（でき

るだけ多くの事例)、フォントや文字の大きさ、レイアウトなど見やすさに拘ったパワーポイント資料を作成。

○ビデオやDVD等の動画の長さは約25分を超えないものとし、事前にそのビデオ内容のポイントをパワーポイントで紹介

○リアルタイムにオンラインアンケートができるホームページを利用 (ICT活用)

◆資料配布に関する工夫

○ラインの構築、情報共有 (ICT活用)

◆評価に関する工夫

○発表するたびにプレゼン点を与える

○レポート (ミニ、全体) への評価

○講義後の要約レポート

○コミュニケーションシートの添削

4. 分析結果の今後の授業改善への活用について

(1) 事例分析によって見えてきたこと

本学の授業における工夫の実践について、自由記述欄の内容を中心に見てきた結果、授業に付随する諸条件による傾向や特徴があることがわかった。特に開講学科ごとの取り組みを見ると、演習科目形式の授業の中でグループ活動を中心としたアクティブ・ラーニングが行われている英文、学生が受講者としてだけではなく将来の指導者の視点で課題に取り組むことが出来るように授業形態や教材等の工夫がされている教育、学部4年と大学院(修士)2年の6年一貫教育のカリキュラムの中で高度な専門性を修得するために、学部の1、2年の講義科目では理解の定着を図る為の工夫が、実践的な手法を用いて取り入れられている建築等、工夫にもそれぞれの学科の特徴が表れていた。

同時に、全体に共通する特徴も見られた。それは「教員の一方的な指導による知識の習得」の手立てではなく「学生自身の主体的な学修」を推進するために授業改善を行うことで、教育の質を向上させることを念頭に置いた取り組みがされているということである。15回の授業全体の目的・目標と、その中の1コマずつの授業の計画を明確にし、科目の内容に応じた課題にもとづき、学生がグループワークや発表を通じて必要な知識とそれを活用する能力を修得していく形で授業を行い、それに時間外学習を加える形で理解の定着を図り、より深い学びに繋げていこうとする取り組みが非常に多かった。自由記述欄に記載された具体的な工夫の内容について「①授業形態に関する工夫」、「②授業展開に関する工夫」、「③教材内容に関する工夫」、「④教材提示に関する工夫」、「⑤資料配付に関する工夫」、「⑥評価に関する工夫」の6つのカテゴリに分けて分析してみると、単独の工夫の取り組みという事例よりも、6つのカテゴリの複数もしくは全てのカテゴリが有機的に結び付く形で授業展開の工夫として記載されたものが圧倒的に多かったことからそのことがわかる。

知識伝達型の伝統的な教育からの大学教育の質的転換の必要性が叫ばれるようになって久しい。社会の急激な変化に伴い、大学改革に対する期待は益々高まる一方であり、同時に現状の大学教育に対する批判も大きい中、授業での工夫を冊子に集約したことで、本学の教育の現状を授業という観点で把握することができたと考えられる。個々の事例からは、先生方が学生の成長に強い思いを持ち、自身の授業改善に取り組んでおられることが

伝わってくる。そして、分析によって学科の違いは勿論、科目の形態や目標も異なり、授業は正に“多様”であるが、全ての授業は学生の主体的な学びの場であり、それが学生と教員による双方向の関わり合いで形成されていることが見えたのではないだろうか。

(2) 今後の授業改善への活用について

① 集約した事例のデータ化と検索システムの構築

本学では、これまでも工夫事例の収集等の授業改善の取り組みを全学レベルで実施してきている。しかしその取り組みを受けてその後の状況や成果を評価し、改善を図っていくという継続的で発展的な取り組みに繋げていくという点では課題もあった。

よって、今回の工夫事例の冊子化に向けてFD推進委員会で検討を行った際、集約した事例を冊子にまとめて終わりということではなく、情報を蓄積して全学的FDに活用出来るようにする必要があるという議論にいたった。そのことを受けて、事例収集を行う際、科目に付随する諸条件から様々な工夫を検索出来る Web 形式のシステムを構築することを想定し、様式を出来るだけシンプルで全事例統一した形とした。

使い方としては、例えば「必修科目で受講者数が100名以上の科目」というような検索条件を設定して、それで事例を検索し、具体的な工夫の詳細を見て、自分の授業改善の参考にすることができる。検索結果の該当事例について改めて冊子を読み直すことも可能である。また、自由記載欄のキーワード検索により抽出した科目の付随条件を分析することもできる。今回の分析にあたっては、事例を1件ずつExcelファイルに入力して作業を行ったが、システム化することでもっと簡単に多様な切り口で統計・分析作業が行えるようになる。そこから得られた結果は一定の汎用性を持つ内容ともいえる。システム化に要する費用については、今年度の教育開発支援室予算にて配賦を受けており、現在、システム化に向けて画面や操作機能の検証作業を行っている。

② 具体的な取り組みの共有化を図るための事例発表会、公開授業等の開催

①で述べたように事例をデータ化し、蓄積したものを分類または統合することにより類型化された知見として活用することも大切であるが、個々の工夫の実践の詳細を情報共有することも重要である。今回、学生のグループ活動やプレゼンテーションを中心にした課題解決型の授業実践と、授業内容の定着と深化を確実なものとするための時間外学習の工夫が多く見られたが、その内容は学科によって、または講義・演習等の科目の形態や受講者数等によってそれぞれ多様であったことは前述の通りである。それらを切り口として実際の取り組み事例の発表会や意見交換会、公開授業等の開催を行うことが可能である。個々の事例の詳細について、実践者本人の口からその実状を聞き、実態を自分の目で見て感じることは、何より説得力の強いものだと考える。本学においては実践例をもとにした勉強会が度々開催されていた時期もある。今回の冊子化が、そのような全学的FDの継続的な展開に結びつくきっかけになればと考える。

5. 課題と展望

(1) 分析結果から見えた課題

先に述べたように、工夫事例を収集し、冊子にまとめたことで、本学で行われている教

育について、授業単位で把握することができた。第3章で各学科における工夫を整理したが、そこに表れた結果はわざわざ分析しなくともある程度予想できた内容であったかも知れない。しかし、個々の教員から提出された内容をもとに量的・質的に分析した結果として提示できるものとしてまとめられたことは一つの成果であったと考える。

しかし課題もあった。一つは「何のために工夫事例を収集し、それをどう活用するのか」という目的・目標の設定が甘かったということである。今回、専任教員の約85%に上る教員から300件を超える事例が提出されており、授業単位の工夫の実態はかなり細かいレベルまで把握することができた。他大学の取組みを見ても、これだけ同時期に自大学の教育を「授業」という観点で全学的に把握した例はなかなか見られなかった。反面、教員にとって出来るだけ簡単に事例を提出できることを勘案し、自由記述を基本とした様式を用いたことによって、提出された工夫の内容やレベルに大きなバラつきが生じてしまった。聞きたいことを明確にしてその為の質問を設定することで、それに対応する回答が得られる。今回はそういう設定が出来ていなかったのも、苦肉の策として、授業に必要な要素・項目として6つのカテゴリを設定し、全ての事例を読み直し、“膨大な自由な記述の集まり”から、各カテゴリに合致するキーワードをピックアップすることで何らかの特徴や傾向を発見することを目的に分析を行った。

結果的に、多くの情報を収集出来ていながら、情報の内容は個々の授業単位に留まってしまった。一部の事例に記載があったものの、各学科のカリキュラムの中での当該科目の位置づけや他の科目との関係性を考慮した上での工夫についての情報は殆ど得ることが出来なかったことは悔やまれる点である。先生方との日常的な会話や、事例の一部の記載から、実際にはそのような視点で授業改善の工夫が行われていることが伺える。しかし事例作成の依頼時にそのことを明示していなかったため、実態を掴むことはできなかった。ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシーの3つのポリシーの策定とその一体的な運用が求められる今、科目を単体として見るのではなく、ディプロマポリシーとどう結び付き、カリキュラムの中でのどのように位置づけられ、他の科目とどのような関係性を持つのかという視点で捉え、教育改善・改革を図っていかなければならない。今後、同様の取組みを行う際には注意すべき点である。

(2) 今後の発展性について

上述のような課題はあったとは言え、集まった工夫事例は宝物のような存在であることは間違いない。他大学における同様の事例集をいくつか見たが、そこに取り上げられているのはどちらかと言えば、学内でも先進的な取組みが選ばれた形で記載されており、他の先生がすぐに自分の授業に活用出来るものばかりではないように感じた。本学の今回の事例集はそういったものとは異なる。先生方が教育研究活動は勿論、諸業務を含めて多忙を極める日々の中で、試行錯誤しながら実践された工夫の集まりである。それを大切に扱い、本学の教育改善に活用していかなければならない。

教育改善・改革の取組みに継続性を持たせるにはその実施体制にも工夫が必要である。プロジェクトやワーキンググループはあくまでも臨時的な組織である。各学科から選出されたメンバーで構成されていても、各部局や学科の通常業務と並行して継続的に取り組んでいくのは物理的にも、組織の制度上の問題からも難しい面がある。一定の権限を持って

全体を取りまとめる役割の組織が必要であるが、そのためにはF D推進委員会の教学局委員会への位置付けや、教育開発支援室の教学 I R機能の強化等の対策が必要ではないだろうか。

本学では「スピード感を持った教育の質向上」のために、全学上げて教育改善・改革に取り組んでいる。3ポリシーの全学的な見直しとそれに伴うカリキュラムの再整理というマクロの教育改革から、学部学科の領域を超えた教員による授業改善の為の研究会活動や、優れた授業実践をしている教員の表彰の動き等個々の授業レベルの改革まで、幅広い取り組みが行われている。今回の工夫事例が様々な場面で広く教育改善・改革に活用されることを願う。

注

- 1) 「学習支援システム μ Cam (Mukogawa Online Campus)」の略。Blackboard 社の LMS である。
- 2) 文学 2 号館 2 階 L2-26 教室を「Skype Room」としている。全学科の学生や教職員が Skype を使い、自分のレベルに応じて海外の講師の英語レッスンを無料で受けることができる。
- 3) 「Technology Entertainment Design」の略称。学術・エンターテインメント・デザインなど幅広い分野の専門家による講演会を主催している米国の非営利団体をさす。TED 主催の講演会を「TED Conference」と言い、この講演会の内容はインターネット上で無料配信されている。
- 4) 一般社団法人日本技術者教育認定機構(JABEE)。JABEE は、大学等の高等教育機関の工農理系学科で行われている技術者育成に関わる教育の認定を行っており、国際的に通用する技術者の育成を目的として 1999 (平成 11) 年に設立された。
- 5) 本学の建築学科・建築学専攻の教育は、日本初の建築系学士修士課程 6 年間の JABEE 認定により、UNESCO-UIA 建築教育憲章対応プログラムとして国際的に認められている。JABEE による UNESCO-UIA 建築教育憲章に対応した建築系 学士修士課程 6 年間の教育プログラムに対する認定審査は 2012 年度に開設され、本学の建築学科・建築学専攻は日本で初めて、この制度により JABEE の認定を受けた。
- 6) コンピュータで楽譜作成を行うソフトウェアの商品名。ピアノ譜からオーケストラ・スコア、タブ譜、パーカッション譜、和楽器や現代音楽まで、様々なジャンルの楽譜作成が可能。アメリカの MakeMusic 社が開発したソフトウェアで、日本での販売は ㈱エムアイセブンジャパンが行っている。